

友垣通信令和3年4月号巻頭言

「角聲一動胡天暁」

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さんを心から歓迎いたします。

また、在校生の皆さんも新学期を迎え、心機一転、4月からの通教生活に向けて、決意をされていることと思います。

世界を席卷している新型コロナウイルス感染症の影響により、全国の小中高等学校等に一斉臨時休業が要請されてから、一年余りが経ちました。昨年度は、新学期早々、臨時休業の継続となり、学習にも影響が出ただけでなく、様々な学校行事も変更や中止を余儀なくされました。皆さんそれぞれに、不安や苦労があったと思います。

こんな中で、オンラインを活用して、斬新な局面を開いた方も多かったようです。コロナがなければ会うことがなかったであろう人との新たな関係づくりがなされました。オンライン婚活で、全く面識のない北海道と東京の二人が入籍した、などというニュースも聞きました。また、外出を避ける、いわゆる巣ごもり生活の中で新しい道具や知恵が生まれ、それが新生活の文化になっている例もあります。ヒット商品を産み出すビジネスチャンスとして活かした企業等は、向かい風にも負けず、前進しようという強いハートやチームワークがあったのだろうと推察します。本当に、人間は逞しいものだな、と感心します。どんな状況でも、下を向かず顔を上げて、自分の進むべき方向を見てさえいれば、何某かのアイデアや活力が湧き上がってくるのだと思います。

ところで、表題にしているのは、私が学生時代に興味を持った、岑参（しんじん）という盛唐の詩人の作品の一節です。この岑参は、進士という、当時の中国国家公務員の難関試験に合格した秀才でしたが、勤務先は、今でいう新疆ウイグル自治区方面、つまり、都から遠く離れた西の方ばかり。当時そのあたりは、匈奴という放牧生活をする異民族との諍いが絶えない地で、冬になると牧草を求めて南下してくる匈奴との戦争が毎年勃発していました。岑参は、都から遠ざかる時の憂愁や身近で起きる戦争への意気込みや不安、友人と久しぶりに会う喜びや離別の悲しみ等々、辺境の地ならではの様々な心情を詩にした人物です。

彼の詩の一つに「送劉判官赴碛西（劉判官の碛西に赴くを送る）」という、友人が碛（砂漠）の西の地に赴任することとなった時の送別詩があります。

自分と同じ境遇となる友人に送ったもので、意気揚々と任地に向かう様子を詠んだ詩の結びに「角聲一動胡天暁（かくせいひとたびうごけば こてん あく）」とあります。「君が今から向かう辺境の胡の地（胡＝匈奴）では、角笛の音が一たび発せられると、夜明けになるのだよ。」という大意ですが、当時は照明等もなく、戦いは日中に限られていましたから、夜明けとともに戦闘態勢。「角聲（角声）」は、戦争開始の合図。これが鳴ると、さあ、戦の始まりだ！という励ましの思いも含まれています。

今から、千二百年以上前のことですから、都を遠く離れると、帰ってこれないかもしれません。それを、悲壮感を漂わせて同情を示すのではなく、「気合を入れろよ！朝、角笛が鳴ったら、戦闘開始だ。油断せず、無事に生きて戻って来いよ！」と、そんな思いを詠ったのだと思います。

新たなスタートを切る皆様に、激励と気合い入れと、愛情をもってこの詩の一節を送ります。「新しい学校で、自己実現のためにやりたいことを実行し、いろんな場面で活躍もし、新型コロナも含めた幾多の困難があるかもしれないけど、粘り強く頑張っしてほしい。困難に出会ったら、自分を成長させるチャンスだと思って、正面からぶつかってみよう。また、新しい地での新たな友を大事にして、一緒に課題や苦労に立ち向かいながら、次のステップに進むんだ。」といった思いを込めて、皆さんの通教生活が有意義なものとなることを期待しています。